

コメント・質問への回答*

泉 正樹

春先から何度か打ち合わせを重ねた「フォーラム」も無事に終わり、個人的にはホッと一息つきました。いわゆる学会報告とは異なる環境に、思いのほかプレッシャーも感じていたようです（学会報告に慣れているというわけではありませんが……）。

また、開催まで一か月を切ったあたりに、急遽、村上允俊氏にコメンテーターをお願いすることになりました。お忙しいなかご快諾いただき、**雑駁な報告**に的確なコメントをご準備くださったことに御礼申し上げます。以下、村上氏のコメントに対する回答と、参加された方々から寄せられた質問に対する回答をできるだけ思い出しつつ、改めて文字にしてみます。

村上允俊氏からのコメント

- (1) (スライド 7 枚目、10 枚目、11 枚目など) 現代をどのような時代かを規定する際に、70 年代を「画期」とし、70 年代以降の発展は「自由競争」は、強力な「政府（国際機関も含む）」とセットで発達（スライド 10）してきたことから、時代認識がズレてしまっているのではないかと、という形で問題提起をされています。しかしながら、政府と市場（自由競争）が手を携えて発展するという現象は、1970 年代以降に特殊なものだとは必ずしも言えない側面があるように思います（例：「自由貿易帝国主義」論、財政＝軍事国家論など）。そのように考えると、70 年代以降に初めて国家と市場が手を携えて発展し始めた、と規定するのではなく、70 年代を画期に国家と市場との関係性が質的に変化した、と考える方が説得的な気がしています。

【回答】 基本的にご指摘の通りだと考えます。コメント (2) にも関係してくると思いますが、私が理解する限りでの宇野の発展段階論の枠組みは、「政府¹⁾」が後継に退くと「自由競争」が伸び、逆ならば逆という、シンプルな造りになっていると思います。このシンプルさが、ある時期までの「時代」を見通す有効で強力なフィルターの役割を果たしたことは十分に評価しつつ、それでは捉えきれない「時代」に突入しているのではないかと、という着想でした。

* 東京経済大学 2021 年度 学術フォーラム「マルクス経済学の現代的スタンダードを語る」（2021 年 10 月 23 日 [土] @Zoom）

¹⁾ 当日の報告時にも補足しましたが、「行政」だけでなく、「立法」も「司法」も含めたいと考えていますので、素直に「国家」と書けばよかったなと思っています。

- (2) (スライド 16 枚目、17 枚目) 16 枚目のスライドで、宇野発展段階論を整理した図式が提示され、それに先述の政府と自由競争が 70 年代以降ともに強化されていくことを示す図式を対比させる形で、宇野発展段階論の現代への有効性に対して疑義が呈されています。しかしながら、16 枚目のスライドで「非商品経済的要因」とされているものと、17 枚目のスライドで「政府」とされているものの間にはどういった関係があるのでしょうか。一口に「非商品経済的要因」と言っても、自作農や家事労働に代表される、商品経済の滲透作用を受けうる領域（ある意味で「経済的」ではあるが、「商品経済的」ではない領域）と、そもそも「経済的」とすら言い難く、商品経済の滲透作用によって解体されることのない「政府」のような領域があると思います。純粋化傾向において退潮するのは前者、「逆転」以降肥大化するのは後者と言うこともできるかもしれません。

【回答】「非商品経済的要因」と報告者は一口に言うけれど、それって一体なに？ というのは、参加者の方々も質問されており、今回の報告で一番関心を惹いた論点だったようです。これまで「非商品経済的要因」と一括されてきた中身を穿鑿する必要があるというのが結論ですが、ご指摘のように、そこには「自作農や家事労働」といった領域から、「政府」のような領域まで幅があると思います。今回、そうした「非商品経済的要因」として、割り切って「政府」を取り出してみた²⁾わけですが、1970 年代以降の「政府」と「自由競争」の伸長の背後では、「自作農や家事労働」といった、従来、市場を通して処理されてこなかった領域の市場化が進むということを念頭に置いていました。

- (3) (スライド 18 枚目) ここまでの論の展開で、宇野発展段階論が現代（70 年代以降）という時代にそぐわないことは、一応理解できるように思います。その一方、この箇所での労働力の商品化を唯一の外的な条件とする「純粋の資本主義」の見直しの必要性にまでいきなり歩を進めており、その部分がいささか言葉足らずな印象を受けました。なぜ原理論にまで手を付ける必要が出てくるのでしょうか。「純粋の資本主義」の回し者というわけではありませんが、そこを温存したまま発展段階論を改良するだけでは不十分な理由や、70 年代以降の変化を「ブラック・ボックス」論や「開口部」を有する資本主義でしか捉えられないという事情があったりするのでしょうか。

【回答】二つの答え方があるかな、と考えています。(1) 宇野の経済学体系において、原理論と段階論はセットの関係にあり、19 世紀末以降の資本主義を「末期」と規定する段階論の見方に疑義が生じるのであれば、その疑義は、対をなす原理論の側にも波及するという答え方。ただ、この答え方では、現状を資本主義の「末期」と理解する人たちからは相手にされません。今回の報告では、(1) の答え方でガンバってみましたが、原理論に内在するかたちの答え方もあると思います。それは、(2) 資本主義なるものを論理的に構

²⁾ ここも当日口頭で少し触れてみましたが、たとえば、価格の度量標準（価格単位）の制定を行う「国家」の役割を「非商品経済的要因」と割り切るわけにはいかないように思います。ハッキリとした方針がわかっているわけではないのですが、何が「商品経済的要因」をなすのか、という問題をギリギリまで詰めていくことで、その補集合として「非商品経済的要因」は明確になるのではないかと、現段階では考えています。

成しようとする、その姿はホントに宇野が説いたような「純粹の資本主義」になるのか？ という答え方です。この方向で原理論の精緻化に取り組まれたのが、山口『原論』、小幡『原論』であると私は理解しています。

- (4) (スライド 27 枚目) ここまでの展開で、外的条件の変化に応じてそれ自体変容するものとしての資本主義像が提示されています。開口部がそれぞれ独立して変容するというわけではなく、外的条件の束や開口部どうしの連動(?)によって、資本主義が取りうるタイプをある程度絞ることができるということだと思います。しかしながら、このスライドで提起されているのは、そうした変化を並べ立てるだけでは不十分であり、そこに何らかの「意味」を持たせたストーリー（発展段階論）が要請される、ということです。極端な言い方をすれば、現代の資本主義を解明するという目的ならば、そうした「意味」は必ずしも必要ではない気がします。なぜ「意味」が要請されるのかということに関して、もう少し敷衍していただければ幸いです。(個人的には、「ある時期に始まって、やがて終わりを迎える」という必ずしも自明ではない資本主義の「歴史」性をどこかで担保する必要がある、という側面が大きいように思います)

【回答】 素朴に、「始まりがある物事には終わりがある」と思い込んでいます。なぜそんなストーリーが必要なのか？ という問いに対して、現状、相手を説得できそうな回答を持ち合わせていないことを自覚できました。

参加された方々からの質問

- 「資本主義の諸タイプを構成する必要がある」とのことですが、諸タイプとはどのようなイメージになるのでしょうか？
- 今回は方法論中心ですが、イメージしやすくするために、開口部、外的条件の変化の具体例を挙げてもらえませんか？ 20 世紀中葉、今の現代、これらの違いなど。それとも、意図的に具体例を論じないほうが良い、ということでしょうか？

【回答】 関連するご質問だと思いましたので、まとめて回答します。「資本主義の諸タイプ」は、総体としての資本主義のタイプというのをイメージしています。そのため、どこか特定の領域を取り出して「何々タイプ」の資本主義を提示するといった方向はさしあたり考えていません。とはいえ、「では、その総体としてのタイプとは何だ？ 方法論だけやって中身がないじゃないか！」といったかなり強い非難が、別の研究会に招かれたときに投げつけられました。この手の考察は、聴き手の神経を逆撫でしてしまうのでしょうか。私自身の『原論』を提示できればご納得いただけるかもしれませんが、それはいましばらくお待ちください。とはいえ、さしあたり部分的な領域のハナシでイメージするとすれば、貨幣のカタチの変化が分かりやすいのではないかなと思っています。16 世紀くらいを「資本主義」のスタートにとりとして、途中何度か中断を挟みながらも、だいた

い 500 年くらいの間、「貨幣」の地位は特定の商品種（具体的には金や銀でしょうか）が占めていたように私には見えます。この「タイプ」が、20 世紀末に、特定の商品種としては確定できない貨幣のカタチに変化したのではないか、というのが私の見立てです。貨幣のカタチを決める地点に「開口部」があり、特定の商品種を貨幣に仕立て上げてきた「外的条件³⁾」が、特定の商品種としては確定できない「外的条件」に取り換えられた。それに連動して、信用貨幣のカタチも変化した、といったことをこの間考えてきました。

- 「開口部」の活動は活発になったり不活発になったりするのでしょうか。だとすると、その「開口部」の活動の活発・不活発の程度を規定する基本的な要因というものは何（資本主義社会におけるどのような状態）なのでしょうか？

【回答】「開口部」はその存在が論理的に推定・確定されるものであり、そこに「外的条件」が作用するというスタイルで私は理解しています。ある領域の「開口部」が大きくなったり小さくなったりするという、「開口部」自体の伸縮の問題は考えていませんでした。

- 資本主義が発展していくとその内部に非商品経済的要因が広がっていくことはありませんか？ 巨大企業内の「官僚化」や、大きな労組と大企業の関係とか。

【回答】「巨大企業内の『官僚化』や、大きな労組と大企業の関係」を「非商品経済的要因」というかどうかは別にして、その内部に「非商品経済的要因」を抱えながら、それぞれの「時代」の総体としての資本主義が存在すると理解しています。

- 「非商品経済的要因」についてその中身としてどのようなものをお考えなのでしょうか？

【回答】いろいろあると思いますが、「商品経済的要因」の方を厳密に確定することで、「それ以外」というかたちで「非商品経済的要因」は明確になると思っています。

- 現代資本主義を分析するために、政府と市場が共に拡大しているとすると、政府の「経済的」活動を理論的にとらえるのか。資本家的活動とは異質な「経済的」活動が肥大化するとき、政府の行う「非商品経済的な」分析が必要なのではないか。{参考：ハイルブローナーは公共部門を「一つの経済部門」として捉えている。} 現代資本主義を分析するためには、公共部門と私的部門の両方の理論が経済原論として必要となるのではないか？

【回答】「公共部門と私的部門の両方の理論」を、これまで提示されてきた『経済原論』の手法で構成することはムツカシイかもしれません。

- グレーバーが言うような基盤的コミュニズムとしての相互扶助関係というようなものを非商品経済的要因として考えたりしていますか？

【回答】グレーバーのいう「基盤的コミュニズム」の内容を知らないままに、「相互扶助関係」という語感だけで、「非商品経済的要因のような気がします……」と当日発声しました

³⁾ 「制度」といってしまえばいいのかもしれませんが。

が、コメンテーターの村上氏から別途、「グレーバーの議論って、そんなに単純じゃないよ」と教えて頂きました。『負債論』、分厚さに萎えてしまって本棚の肥やしになっていますので、時間を作って挑戦したいと思います。

- 報告者は両大戦間期のロシア革命や大恐慌の資本主義に与えた影響を過小評価していないか？ソ連型社会主義が崩壊したからと行って、それが資本主義に与えた影響は無視できないのではないか？

【回答】資本主義にとって、「両大戦間期のロシア革命や大恐慌」は大きな影響を与えたと思っています。当時の「時代」を体感できていないのですが、資本主義が「末期」に直面しているという見立てに強い説得力を与えた出来事だったのであろうと考えます。

- 労働論を「主体とモノ」の二分法から出発して展開するのは無理があるのではないか。例えばその場合、感情労働はどう説明されるのか。労働「主体」が、自分の感情を「モノ」としてコントロールするというのは擬制的に過ぎるように思われる。現代の労働を考えるためにはデカルト的な心身二元論の批判が必要ではないか。

【回答】21枚目のスライドをお示しした際に、「最近、『生産論』も『流通論』と同じ出発点（主体とモノ）から論理的に構成できるのではないかと考えています」という趣旨の発言をしました。その点に関するご質問です。私も制作に関わった『これからの経済原論』（ぱる出版、2019年）の中で、労働力としての主体を、「意識」と「身体」とからなる存在として提示してみました（70頁）が、近年のこうした流れを危惧されたものと拝察します。労働論の基本的な造りは、「意識」が「身体」をコントロールし、「身体」が「モノの世界」をコントロールするという組み立てにあると私は理解していますが、「感情労働」についてはこの造りでは歯が立たないのではないかと、というご指摘だと思います。「感情労働」についてそれほど詳しいわけではありませんが、質問者は、「労働『主体』が、自分の感情を『モノ』としてコントロールする」といわれます。一つの見方だと思いますが、他方で、〈労働主体が、自分の身体をコントロールして他者に知覚可能なかたちで『感情』を演出する〉と捉えることもできると思います。この場合、主体が「意識」でコントロールしているのは「身体」であり、さしあたり、労働論の基本的な組み立てで対応可能かな、と思います。人間は、「心」と「身」というそれぞれ異なる二つの実体からなり、それぞれが異なる法則に支配されて動いているが、人間においてはこの二つの実体が巧く結合されて一つの個体として構成されているという、「デカルト的な心身二元論の批判が必要ではないか」というご指摘には賛成で、この問題を事実上取り扱っている最近の労働論をさらに深掘りしてみるつもりでいます。

- * 感情労働についての報告者の回答には納得できない。対人サービスにおける顧客（の感情）は、外延をもった対象という意味での「モノ」ではあり得ないと思います。また、感情労働がコントロールするのは基本的には労働者自身の感情であって、顧客のそれではないとも思います。他者の感情は原理的に不可知である以上、

コントロールできるのは〈他者の感情に働きかけようとする自己の感情〉だと考える方がよいように思います。だからこそ、感情労働論では「顧客に向けられた労働者自身の感情と労働対象としての顧客の感情」のうち、「主として前者が考察の対象」になってきたのだと考えられます（阿部浩之「感情労働論理論とその可能性」『季刊経済理論』第47巻第2号、2010年、65頁）。このような労働過程を「目的意識的活動」という従来型の労働規定で描写しようとする、「主体」の「意識」が自己の「意識」に働きかける、といった循環的なかたちになってしまっていて、説明になりません。「主体」と「モノ」、あるいは「身体」と「意識」といった構図で労働を捉えようということ自体にやはり問題があると考えます。

【回答】「感情労働も労働論の基本的な組み立てで対応可能だと思います」という回答に対して、さらにご指摘いただきました。いくつかの問題が絡まっているように見え、ゾクゾクします。ご指摘の要点は、感情労働を「『目的意識的活動』という従来型の労働規定で描写しようとする」、「主体」の「意識」が自己の「意識」に働きかける、といった循環的なかたちになってしまっていて、説明になりません」という点にあると理解しました。前回答の繰り返しになりますが、感情労働においても主体の「意識」がコントロールしているのは自分の「身体」ではなかろうか、と私は考えます。肚のうちでは「かったるいわぁ…」と思いつつも、お客様の前ではそんな素振りはおくびにも出さず、姿勢を正して眉間を脱力し、口角を上げて相手の話を傾聴するといった身体操作を行うことで、傍目には〈微笑みを絶やさず親身に対応してくれる人〉をさしあたり他者に対して演出できるように思います⁴⁾。もちろん、そうした演出の受け取り方は人それぞれで、「なんかコイツ、嘘くさい」と評価されてしまうこともあるでしょう。そうした評価を覆す必要がある場合には、チョット碎けた感じを演出するために身体操作を切り替えるとかいったことを行うのではないのでしょうか。また、「対人サービスにおける顧客（の感情）は、外延をもった対象という意味での「モノ」ではあり得ないと思います」という点については、顧客の感情も顧客の「身体」を介して提示される⁵⁾という意味で、労働主体にとっては知覚可能な外的対象としての「モノ」の一種として扱うことができるように思います（突き詰めて考えてみたわけではないのであまり自信はありませんが……）。さしあたり以上のように考えているため、感情労働論が、労働論の基本的な組み立てを放棄させることになるとは思っていません。

⁴⁾ 感情労働に限らずこうした身体操作に関してさらに考えてみたいことは、ある労働に求められる文字通りの「体勢」を整えることで、「意識」の側も「仕事モード」に切り替わるといった論点です。「意識」が「身体」をコントロールするというのとは逆に、「身体」が「意識」をコントロールしているように見えるケースですが、そのことが、目的を設定し手段を逆算して「自然過程」を明確にし、目的実現に向けて「過程」を逐次的にコントロールするという労働論の基本的な組み立てにどのような関係するのか／しないのか、という点は今後考えてみたいと思っています。

⁵⁾ 主体にとって直接知覚できない「価値」そのものが、他商品の使用価値のすがたを借りて現れるという組み立てとチョット似ていてオモシロいと思います。